

新陳代謝による商店街活性化

倉持裕彌

はじめに

本稿は、筆者が調査に加わった鳥取県商店街振興組合連合会（以下県振連）の調査研究事業について報告する。

当該事業は、鳥取県内の商店街の活性化をテーマとして、これまで、県内・県外商店街の事例調査から、商店街の事業主同士や顧客とのコミュニケーション力が不足していることを明らかにし、具体的な改善策を米子市紺屋町商店街において実施するなどしてきた。今年度は、商店街の活性化の重要な要素としての「新陳代謝」をテーマとして調査研究を実施した。

1. 新陳代謝が求められる背景

商店街の衰退を感じさせる理由の一つに、変化の少なさが挙げられる。建物や店舗などのハード面が古いままであるだけでなく事業者・利用者・通行人といったソフト面も、年を重ねているだけで変化はしていない。活性化を推進する振興組合の幹部も長年変わらないことも多い。ネットショッピングの台頭や郊外の大型SC（ショッピングセンター）の進出にみるように、商業環境が目まぐるしく変化している現代において、変化の少ない商店街は時代に取り残されているように映る。

そこで、ベテランばかりのサッカーチームに若手の台頭が期待されるように、商店街も事業者の代替わりという新陳代謝を図ろうとする動きがある。これによって、組合のメンバーも入れ替わり、活性化に向けたこれまでにない発想やエネルギーを得ようとする。中心市街地の活性化手法として最近注目を集めるリノベーションスクールも、新陳代謝を促す仕組みを有している。

2. 事例調査

鳥取県の商店街の新陳代謝を検討するために、事例調査を3か所行った。空きビルをリノベーションして活用する岐阜県岐阜市的美殿町商店街、盛況な市（いち）と商店街の活性化を結びつける大阪府枚方市の「くわらんか五六市（ごろくいち）」、枚方市を参考に市（いち）に取り組む大阪府堺市の鳳商店街である。これらの事例に共通するのは、40代～50代の年代の事業者が中心となって活性化に取り組んでいることである。事業者の新陳代謝の効果が現れている事例ともいえる。

調査の結果わかったのは、いずれの事例も、事業者の新陳代謝について特別な事業を行っていないことである。それぞれが代替わりの時期を迎えてスムーズに世代交代を行い、新たに商店街を担うことになった世代によって特徴的な事業が営まれている。ただ美殿町商店街と枚方市の事例は、年齢的な新陳代謝だけではなく、地域の外部からきた事業者や建築士などの専門家を活性化に取り込み、外部と内部の間の新陳代謝も図っている。彼らは活性化において重要な役割を担っているが、彼らにそのような立ち位置を用意し、支援しているのは、古くから商店街で商売している男性・高齢者層ではなく、地域の若手、あるいは女性のリーダーであったことも特徴であろう。

3. 考察

鳥取県内の各商店街も活性化に向けて新陳代謝を意識している。しかし、若手の事業者や外部からの新規の事業者の確保に苦労している商店街が少なくない。枚方市のくわらんか五六市は、市（いち）への出店者に対し、地域や商店街に出店してもらうよう声掛けを行う場として機能している。

また、市（いち）に魅力があることも、出店者を集めるうえで重要となる。枚方市の場合、出店者が思うように集まらなかった初期は、他の市（いち）である程度名の通った出店者に頼み込んで出店してもらったという。こうした出店者は、すでに顧客を抱えており、彼らが出店する市（いち）とい

うだけで、ある程度の集客が見込めるそうである。集客できる市（いち）であれば、出店希望も増える。鳥取県内でも、商店街の店舗に出店することにハードルを感じている出店希望者も少なからずいるはずである。新規事業者による新陳代謝を促すために、彼らの受け皿となるような、気軽に参加でき、魅力的な市（いち）を創設することは有効であろう。